

549
208

549-208

1200501507316

[Faint vertical text on a small label]

25. 9. 14

2-3890

549-208



サブライムな風光、デリケートな温泉、それは天の成せる恵澤であり、實にわが半島の誇りである、唯だ訪ひ来る都人士の少きは、交通不便に禍ひされるためである、伊東稻取間の自動車道が向ふ四ヶ年に、また仁科船原間のそれが向ふ五ヶ年に縣營として計畫され、辛ふじて一周の陸路を貫き得べきではあるが、決してそれだけで半島民は満足して居られぬ、政府の豫定線たる半島循環鐵道は、熱海驛から分岐し、伊東、稻取下田、松崎、湯ヶ島を経て駿豆線の修善寺驛に連絡するものであり、われ等はその速成を希望して止まず、豫て期成同盟會を組織し、本部を下田町役場に、支部を伊東町役場に置き、多年一日、これが實現運動を怠らぬ、茲に敢へて本冊子を廣く江湖に頒布する真意の、果して那邊にあるかは、切に讀者の諒承に待つ。

伊豆循環鐵道期成同盟會



今寄贈本

小 引

大正十五年の夏、一流の新聞記者を續けさまに迎へ得たことは、誠にわが半島の光榮であつた、朝日新聞の海南先生一行は、七月二十四日三島から中豆を経て西海岸に出で、土肥、松崎、下田、白濱、伊東、熱海を巡遊され、國民新聞の蘇峰先生一行は、七月二十六日熱海から東まわりの道を選び、伊東から修善寺、それより天城越えに谷津に出で、下田、子浦、土肥へと遍歴された、行旅を異にした兩先生が、二十七日谷津温泉で邂逅されたのは奇遇ともいふべく、その後間もなく新聞紙上に載せられた二旅行記は、半島民に大なる衝動を與へ、將來の鐵道速成運動に少からぬ自信を鼓吹した觀がある、二つの旅行記にはそれ／＼の特徴を有し、海南先生のは瀟洒輕妙のうちに犀利なる經綸を藏し、蘇峰先生のは剛健莊重のうちに溫藉なる情趣を溢らしてゐる、たゞ半島の風物を嘆稱するゝ點に於て二者全く揆を一にした、もとより兩先生とも羈旅匆忙裡の執筆に係り、他日推敲補修の上、印行さるゝのであらうが、われ等は其日を待遠しとし、強いて兩先生の認諾を懇請し、こゝに半島旅行の冊子二部を姉妹篇として編纂し、伊豆循環鐵道期同盟會から、緣故者に頒つことにした、われ等は此機會に臨み、半島民と共に、兩先生に重ねて深厚の敬意を表す。

大正十五年十二月一日

伊東、後 調子 誌

兩先生旅程

| 月 日 | 經 由 地 | 同行者 | 經 由 地 |
|--------|-----------------|---------------------------|---------------------------|
| 七月二十三日 | 東京、三島、韭山、修善寺、三津 | 下村 宏氏 石井光次郎氏 霜山 經助氏 | 德富猪一郎氏 同 夫 人 高橋源一郎氏 |
| 二十四日 | 三津——土肥 | | |
| 二十五日 | 土肥、仁科、石廊、松島 | | |
| 二十六日 | 松崎、下田、蓮臺寺 | | 大森、熱海、伊東 |
| 二十七日 | 蓮臺寺、白濱、湯ヶ島 | | 伊東、修善寺、白濱、下田 |
| 二十八日 | 湯ヶ島——伊東 | | 下田、手石、石室、子浦 |
| 二十九日 | 伊東、熱海、伊豆山 | | 子浦、仁科、土肥 |
| 三十日 | 初島、伊豆山滞在 | | 土肥、三島、大森 |
| 三十一日 | 此日又ハ次日東京へ | | |

伊豆巡遊記目次

伊豆めぐり

(下村海南先生筆
七月二十一日以降東京朝日新聞連載)

- 一、四番茶……………一
- 二、指月城……………二
- 三、松下村塾……………六
- 四、三島の宿の丑五郎……………九
- 五、江川太郎左衛門館……………一三
- 六、肩へ筒、前へ進め……………一五
- 七、砲兵工廠と品川砲臺……………二〇
- 八、反射爐、臺場、農兵(再び)……………二五
- 九、修禪寺物語……………二九
- 十、長岡、三津、土肥……………三三

十一、堂ヶ島と石廊岬……………三五

十二、下田條約……………三六

十三、吉田松蔭疥癬物語……………四〇

十四、唐人お吉と下岡連杖……………四三

十五、白濱から天城越……………四六

十六、頼朝と八重姫……………四五

十七、新編會我物語……………四七

十八、尻摘祭……………四九

十九、初島のバツカリ……………五〇

二十、伊豆はどうなる？……………五三

(右のうち、第十、第十一、第十五、の三章は石井睡蓮先生の筆になる)

下村海南先生
伊豆めぐり

(編者いぶ、本篇二十章のうち、第十、第十一、第十五の三章は同行の石井睡蓮先生執筆に係る)

四 番 茶

去年の夏は北海道樺太で三番茶を煎じた。今年の夏はどこで四番茶を煎じたものであらう？
この月はじめに高原蟹堂と長州萩に遊んだ、指月の城より江を隔てて反射爐を望んだときに、フト伊豆の葦山を連想し、松下村塾をたづねた時に、松陰が米艦のあとを逐ふた下田の港に想到した。

小さい近い狭い、しかも世間に知られ過ぎた伊豆の半島、源頼朝や豪僧文覚や、法華の行者日蓮の流された伊豆、叔父の蒲冠者範頼と甥の御曹子頼家が非業の最後を遂げた伊豆、伊勢新九郎長氏の風雲をまき上げた伊豆、幕末には江川英龍や下田條約に名を賣り、明治に入りては紅葉山人の金色夜叉でお宮貫一の夫婦煎餅や、繪葉書まで賣りだした伊豆、大正の今日となりては夏向きに丹那トンネ

ルの水藝で評判をとつてる伊豆。

山あり海あり、いづれに足をとめても天然の温泉は旅塵を洗ふに足り、四季の行旅にとりぐの趣ある伊豆、ありふれてる場處だけに正直正銘のだから四番茶を、伊豆半島にせんで見る事にしよう。

二十三日沼津静浦を振りだしに足がどちらへ向いてゆくか、マア出かけて見ぬ事には分らない、こゝにはまづ伊豆に足を向けしむるに至りし、長州萩の指月の城と松下村塾の二篇を前觸れとする。

二、指月城

大天井垂乳の岩を見まくすれど足のふみどのさだまりかねつ (秋吉鐘乳洞)

峽いで、野は開けたりまさをもり上りたる指月山見ゆ (萩の街)

中国九ヶ國にまたがつた百二十萬石の大々名毛利輝元は、防長二州三十六萬九千四百余石に削封されて、築城したばかりの藝州廣島を福島正則に引き渡し、周防山口の白石に假寓し、更に新なる居城を選定せねばならぬことになった。

時は慶長の八年冬とも、また明けて九年の春ともいふ、輝元の命をうけて山口から江戸へ上つた國

老福原廣俊は、幕府の老中本多正信の邸にまかりいで

『さてこのたび輝元防長二州を下しおかれ有りがたき仕合せに存じまする、ついでには居城として詮議を重ねましたるところ、三田尻の桑の山、山口の鴻の峰、萩の指月山、まづこの三ヶ所の内かと存せられまするが、いづれに定めて然るべきか、一應御尊慮のほど御洩し下されたく』と來意の趣を披露におよんだ。

家康の懐刀とうたはれ、三百の諸侯を掌中に弄んでゐた正信は、しばし打案じてゐるが、やをら火桶にかざした手を膝にのせて、廣俊の前へグツグツ仔細あり氣な顔をつきだした。

『桑の山、鴻の峰、指月山……いづれも要害の地なれども、海をめぐらせし指月こそ……』

といった。なるほど中國の街道から二十里近く奥まりたる萩は、道中に手数がかゝるだけでも要害であつたらう。しかしさすがの正信も、まさか以後年幕府が長州征伐をせねばならぬ破目にならうとは夢思はなかつた。もつともこの長州征伐には長州どころか防州の國境で、毛利軍に敬意を表しそのま

ま、まはれ右前へで退却したのだから、三田尻、山口、萩いづれであつても仔細はなかつた。しかし正信の腹の底は、城の要害でもなんでもない、毛利は關ヶ原では西軍の旗頭となり、島津と相並んで西國外様大名の筆頭であつた。その毛利の居城が中國街道にのさばり出られては、何かと事

面倒である。名目は要害にありだが、實はマア萩の奥へ御遠慮ありて然るべし、一寸した話が、江戸參勤交代に萩から中國街道へ出るだけに、丸二日は余計につぶれる、それだけでも藩の出費がかさむといふものだ。

征韓の出師以來、廣島の築城、關ヶ原の出陣、大阪伏見の置邸、そこへ實收五十三萬石余とはいへ、この大削封、この上とも毛利には限らぬ諸大名を、財政の上に出るだけ疲弊せしめたいのが幕府の大方針である。この位の分別は正信をまたずとも大凡の見當がつく。福原廣俊は正信の腹の底が見えずいてるが仕方がない、イヤ誠に御尊慮御もつとも、とあつて引さがつた。

指月の城は慶長九年三月修築の工事にとりかゝり、十三年六月にいたり落成を告げた。もつとも輝元は九年の十一月から萩にうつり、常念寺に假寓してゐたといふ。萩へ引あけて足かけ五年のお寺住居、これも見方によれば、輝元が幕府への氣がねとも、とりてとれぬことはない。

ところが要害堅固であつたはずの指月の城が、一番危ないといふことになつた。三百年鎖國の夢をむさぼつてゐた日本は、外は見すにたゞ内側ばかり見てゐた。井の底の蛙大海を知らなかつた。否大海の波は指月の城に打ちよせてゐたが、黒船が來て大砲の丸を飛ばすといふことは夢さら想像されなかつた。

かういふ時代になると、今まで一番要害堅固であつたはずの指月の城は、一番危なくなつてくる、足元から鳥が立つやうに時は文久三年、忠正公は居を山口に移してしまつた。同じことならモウ一足ふむ張つて三田尻まで出てゐたら、山口とちがつて縣廳も山陽沿線に顔をだす、さぞや便利なことであつたらうに、惜しいことをしたものだ。

指月の古城は、今は満目皆夏蜜柑の島になつて、黄なる實が青葉若葉の間に累々としてゐる。入江を隔て、菊ヶ濱の松原がつづく、その東には砲臺の舊跡が残つてゐる。更に東に眼を轉ずれば、松陰神社と越ヶ濱の中間戎ヶ鼻のあたりに、二またになつた古い煉瓦の不格好な煙突が見える。大砲製造でやかましかつた反射爐である。いづれも人心恟々、物情騷然たりし幕末當時の生々しい歴史を物語つてゐる。

今巨艦陸奥は舊砲臺前の入江に靜かに横たはつてゐる。寅二郎、晋作、小五郎、狂介、俊介などの孫や曾孫にあたる小學校の生徒たちは軍艦見物とあつて海上の浮城に小舟を急がせてゐる。木下利玄の歌が思ひだされる。

軍艦の八幡ゆるがぬ胴中をさゞなみうてり灣の靜けさ

近頃は四海波靜かなれば軍艦もこの浦に來てどんたくをせり

三、松下村塾

さゝやけきこの家の前にまこと我立ちてしいだくつゝましきおもひ
ヤ 狂介、オ 俊介と横垣のこのかけにして手を握りしか

阿武川の中洲になつてゐる萩の街、そこに久坂玄瑞、高杉晋作、木戸孝允、山縣有朋などの舊宅が
点在してゐる。

東、萩に渡れば東の方毛利家累代の菩提所、四大夫十一烈士の墓處である東光寺を脊にして、松陰
神社、松下村塾、松陰幽居の家などが一廓をなしてゐる。

社前には松陰先生の台柄と稱せらるゝ米春台が保存せられてある、安政五年六月二十八日先生村塾
より在京の久坂義助に贈りし書中に

隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居七ツ過會讀終る、それより畠又は米春與ニ在塾生ニ同之、米春大
得ニ其妙、大抵兩三人同じく上り會讀しながら春之、史記など二十四五葉讀む間に米精げをはる、
また一快なり。

とある、松陰先生二十三歳にして安積良齋、佐久間象山に従ふて學び、次で安政元年二十四歳にして

伊豆下田に米艦搭乗を計り、事破れて江戸の獄に下る、次で萩の野山獄にうつされ、後免されて杉家
に錮せらる、幽囚中、家學山鹿流兵學教授のため門人の引見を許され、松下村塾を開く。

兵學研究に名を借りて門人等來りて學ぶ者多く、八疊敷の小舎狹隘を告げ、門人等鋸をとり鑿を手
にし、土石を運び地をならし、壁を塗り屋根をふき、十疊半の一室を建て増したといふ、その村塾の
前に倉庫がある、先生刻苦精勵寸陰を惜み、行往座臥講話抄録を絶たず、倉庫納むるところ、ほとん
ど擧げて皆書冊である。

芳洲の外蕃通略、林子平の海國兵談はもとより、蘭人風説、接魯問答、米魯嘆條約、坤輿圖識、八
絃通誌、海外異傳、海島逸誌をはじめ、先生の著書は幽囚録、回顧録、幽室文稿、二十一回叢書をは
じめ、二十九歳で相果てし生前の作品、實に百二十餘冊に上つてゐる。

松陰先生、老中間部詮勝要撃の事に座し、安政五年十二月投獄の命下り、翌六年七月江戸の獄にい
り死罪に斷ぜらる。

親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらん

とは十月二十日認めた永訣の書に記されたる歌であり、

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置まし大和魂

とは獄死の前二日、十月廿六日留魂録に記されたる辭世の歌である。その留魂録四つ折のちり紙が六七枚、ガラス戸を隔てよく見えない、今日は何とかいふ人がるないといふので、ガラス戸はどうしても開けてくれぬ。

立ち去りかぬるガラス戸の内、留魂録と並んだ先生の抄録の中に、松葉に木の子を添へし繪に名月に香は珍しき木の子かな

と題したのが見える。先生が漢詩と短歌の外に、かうした俳味にも恵まれて居た事は、いかにも嬉しい。十八疊の松下村塾は、安政三年七月より五年十二月入獄まで、わづか二ヶ年半しか開かれなかつたが、維新回天の大業を仕上った志士

高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允、前原一誠、野村靖、品川彌二郎、山田顯義、山縣有朋、伊藤博文

などは皆この村塾から輩出した。

先生のあとに残り明倫館舎長となり、奇兵隊長となり、内は俗論黨と戦ひ、外、隣藩、幕府、外國を相手に砲彈と言論とにより折衝した門下生高杉晋作は、先生と一つ違ひ二十九歳で果てた。昔ながらのまき垣に添ひ柿の木のとをめぐり、村塾と幽囚の室のあたりを低回してゐると空に聲がある、

『お前はモウ何歳になる？』

『僕はモウ五十二歳、あと六歳で先生の壽命の倍になる！』

『イヤ人間の働くのは二十歳越してからヂヤ、松陰先生は正味九年働いて亡くなられた、お前などは五十二から二十年差引きて三十二年、三倍近い歳月をすごしてきたのだ、……たゞ無駄にナ』

空の聲がつづく
『維新の志士は國禁をくどりく不完全極まる學問をなし、三十歳ならずして亡くなられたが、あれだけの仕事をした、今の連中は大手振つて完全な學問を修めてるやうだが、仕事は出來ずに、たゞ年だけ食つてゆく様だ』

所？時？人？
明倫館のあとに建てられた小學校からは、今三々五々家路をさして子供等が歸つてゆく、完全な教育をうけつゝある男の子も女の子も。

四、三島の宿の丑五郎

君まだ社に居たの？

先走りにも程がある、足いまだその地に印せざるに、麗々しく紀行文がでる、正に前代未聞である、だしがらの四番茶でなくて走り茶だといふ。

今更走り茶でもあるまいから、三島の宿場から伊豆の旅と看板を塗りかへる。

二十三日朝の特急は函嶺にむかつて走る、沼津につく、舞坂で開かれし静岡縣朝日會をすませた石井睡蓮の一行と出遇ふ。

一行はまづ三島神社に参詣するといふので自動車を三島に走らす、途黄瀬川を横ぎる。

『富士の白雪や朝日でとける、とけて流れて三島へおちて、三島女郎衆の化粧の水。』

といふ歌で三島の名が賣れて居るが、それはうそで、富士の白雪のとけて流れこむのはこの黄瀬川だといふ、さうなると三島女郎衆の手水、紅かね、化粧水、夜明けの酔ひざましではなくて、冷靜そのもの、權化の如かりし頼朝も、治承四年であつたか、富士川に出陣の砌であつたか、陸奥からかけた義經の手を握りて、今頭殿（父左馬頭義朝）の顔を見るが如しと、さすがにうれし涙に暮れたといふ、その涙のぼろ／＼と流れ込んだ川の水といふ事になる。

町の有志に迎へられて三島神社に参詣する、左に折れて二町許り岸を浸せる清流に沿へば水上にで

る、更に左折して元は小松宮、今は李王殿下の御用邸内に有名なる小濱の池がある、すぐ熊本の水前寺が連想される、夏猶寒き清冽なる泉はこん／＼としてあふれてる、水郷の町三島を流るゝ清泉は、これではどうも富士の白雪がとけて地下をくゞつて來たのらしい、マアこの邊のところは専門の方へしかるべく譲ることにする。

三島の宿といへば神崎與五郎則休東下り堪忍ぶくろの一席で、耳についてる宿場である。ところが石黒況齋翁の隨筆『耄碌』によると、馬食ひの丑五郎とあるは國助の誤であり、馬に乗つてくれといふのがいひがゝりになつてゐるが、實は駄馬の乗り繼ぎをするとき、足がかゝつて荷物を損じる、そこで國助が赫として、預かりものに土足をかけたナ、三ピンどうするのだとケツをまくつたのだといふ事である。

お芝居や講釋では馬に乗れ乗らぬといふ方が話の足取りは面白い、名前も國助では義僕とでもいひたくなる、丑五郎で至極結構であるが、どうしても結構と参りかぬのは、肝心の神崎與五郎則休が大高源吾忠雄の誤だとある。

もとより神崎與五郎が源吾の氏名を詐稱したわけでない、後世何者かゞ知つてか知らずか與五郎にしてしまつたのだ、そこで取敢へず案ずるに、義士銘々傳では大高源吾は笹賣りで、モウ一役割りふら

れてある、成るべく一人一役に願ひたい、サテたれに割り當てよう？七段目の間や竹森や武林では分別が無さすぎる、六段目の原郷右衛門では分別が有りすぎる、コリヤ神崎君に願はふといふやうな、作者の筆の先の氣紛れかも知れぬ、下戸の赤埴源藏が酔ひタンボの源藏になるのだから、この位のお筆先は少しも珍しい事ではないぞよ。何にしてもお筆先はおそろしい、高師直翁や梶原景時老などは實惡の一手專賣にされて仕舞つてるが、又神崎君の如く好い籤を引きあてたのもある、三島ではアリヤ大高だイヤ矢張り神崎だ、イヤ大石瀬左衛門だといふ人もある、ソウなるとモウ専門家へお渡しする外はない。

源吾の詮證文が因縁となつて、江戸で講釋師が修業を積み、いよいよ一枚看板となるには、まづ中山道を京に上り東海道を引かへす、三島の本陣世古六太夫の宅で、義士銘々傳の長講一席を辯じ上る、世古の印を旅日記におしてもらひ、江戸へかへつて仲間一同に披露する段取になつてゐたといふ。

東海道五十三次、昔の面影は次第々々にうすれてゆく、數多い本陣の中から専門家に今のうち二三考古の史跡たるべきものを指定して貰ひ、保存をして置きたいものだ。それにはこの三島などが宿場としても本陣としても推薦したい候補地である。

しかし推薦して見ても、肝心の世古の家は牛臥に引越して、本陣はあとかたもない、樋口といふ本

陣もあつたが、これも僅に庭だけ残つてるといふ、どうだらう街道筋で今猶面影を残してゐる本陣があるだらうかといへば、サアまあ元箱根位だらうといふ。いま自動車はその函嶺を左に仰いで、葦山に向き走つてゆく。

五、江川太郎左衛門館

天正小田原の役は、秀吉にとりては雌雄を決するとか勝敗を争ふとか、そんな緊張した心持よりも、大觀兵式舉行位の遊戯氣分で、たゞ一にらみに睨つぶしてしまふといふ意氣組であつた。

果して八州の城塞は風を望んで降つたが、その中でただ一つ葦山の城が陥らない、葦山は伊勢新九郎長氏が、堀越御所を破りて居城せる北條家由緒の地であり、驍勇をもつて名ありし美濃守氏規これに立こもり、織田信雄、福島正則、蜂須賀至鎮、生駒親正等、五萬の兵をもつて陥ることが出来ぬ。

氏政からも小田原入城をすゝめる、家康からも開城をすゝめる、氏規は我壘に對して彈丸を發す、城を至すは本意に非らず、願くは城を徳川殿に致さん。

といふ、秀吉その志を壯としてこれを許し、氏規は城を出て秀吉と成を議すとある。この名譽の歴史を持つ葦山城は、水郷三島をあとに名物丹那の盆地を左に見て、下田街道を南に北

條の村に入るころ、左に近くそれと見られる。

右の小山の麓には古奈と相並びし堀越の御所跡がある、左葦山城のふもとには頼朝の流された蛭ヶ小島の碑が、早苗田の中に立つてゐる。

城山について回れば破風造りの茅葺の大きな建物が眼につく、有名な江川太郎左衛門累代の住宅である、江川の館は鎮守府將軍左馬權頭源満仲次男、宇都頼親より九代親信。保元年中伊豆八牧江川の庄に移りし時の建築にかゝり、間口十三間奥行十間棟高五間五尺面積百五十三坪にわたる、生育せる立木をそのままに利用せる生柱と、日蓮上人自筆の防火妙符の棟札とが珍しいものになつてゐる。

葦山城の圍の時に兵火に焼かれなかつたものだと不思議に思ふたが、江川家所藏の記録を借りて見るに、二十七代江川英吉は氏規の下に葦山城を固守し、その子二十八代英長は家康に屬して居たが、秀吉開城の事を家康に囑せる時、家康は、江川の家作が保元以來の舊宅なるをもつてこれを毀たざるを條件とし、英長を葦山城へ使者とし開城の事成りしとある。

江川家の裏門は北面して城に隣つてあるが、その門扉には尙銃丸刀矢の痕を遺して居る、俗に富士見十三ヶ國のうちで、口伊豆の眺めを第一とし、口伊豆の眺めにはこの江川邸の裏門を第一とすといふ、つまり江川家の裏門が日本一の富士見の名所となるわけだが、これは割引してかゝらねばならぬ

い。しかし何故こんなうはさが立つたかと思ふと、矢張り江川家の記録の中に

松平定信侯海防のため豆州沿岸巡視の時當地に來り、裏門より富士を遠望しその絶景を稱し、隨行の谷文晁をして之を寫さしめ、文晁に寫山樓の號を賜ふ

とある。いづれにしても私人の邸宅としてかくまで長く保存されてゐるものは例が少い。明暦の年江戸本丸造營の時、當家作の往古より一度も火災に罹らず珍しとあり、その家道具上納の命あり、三十年代英利より棟木一本を獻じたりとある。日蓮上人の防火の護符の寫しがいまだに遠近の信者におくられてるといふ、保元から大正十五年まで江川の館はまさしく七百七十一年を経てゐる。

六、肩へ筒、前へ進め

江川の館の正門をいづれば、頼朝のために、惚れた政子はとられ、擧句の果が自分の首までとられた平兼隆の山木の砦のあとが稲田を越えて真近に見える。

正門の前には江川英龍、英敏、現當主英武三代にわたり、洋式の兵事教練を農民に施した、思ひ出深き廣場がある。

士農工商の別を廢し、國民皆兵の制を立てた事は、廢藩置縣と相並んで維新の二大革命であつたが、

幕末、一韭山の代官江川英龍が當路に農兵の制を説き、遂に自らこれを管内に決行した事は誠に驚異に價する、江川家の記録を見るに

坦庵の師高島秋帆は練兵の際和蘭語をもつて號令せしも、坦庵はこれを國語に譯せり、「肩へ筒」、「前へ進め」等の如し、大正の今日尙これを用ふ。

とある。この廣場で「肩へ筒」、「前へ進め」の號令の下に、例の韭山笠の農兵の足踏の音が國民長夜の眠をさましつゝあつたのだ。

三島の舊家で三等郵便局長中故參中のその又元老として、筆者親護りの友たる渡邊壽太郎老に迎へられて、車中この農兵の事を話したら、三島に布かれたる左の農兵の規約書をとりよせてくれた。如何にも珍らしい、面白い、左に録して農兵そのものと、當時の民情とをしのぶよすがとする。

宿内防禦筋議定

方今上方筋の大事件下として奉_レ恐入_ニ候得共、上は諸侯大夫にも軍務に無_ニ御暇、御支配(韭山代官の)に於ても同じく御多端の折柄、窺_レ隙惡徒不憚の族往々爲_レ群、不_レ憚_レ上恣に横行眼前の様に被_レ存候、斯る時勢を三百年來の昇平に比し、銘々家務のみ心を委ね居るも、所謂前門の虎を知、後門

の狼を如_レ不知、不時の災害難_レ斗、當今は嚴然たる威氣を表に顯し、専ら外邪を防ぎ内を和し候計肝要の時節に候、仍_レ之拙者共一同計議を遂げ、宿内自衛の銃隊を備候外、他事有間敷決評いたし候、依ては宿内重立候有志の人に炮術傳習致度、尤今般は銘々自己の守衛他事に不拘、只々自衛のため一致に和し、親疎の無_レ隔、父子兄弟のため相互に助合守衛專要に可_レ致候、且東西の御軍勢御出張有_レ之節は、外亂妨_レ之憂も有間敷といへども、窺_レ虚浮浪蠻徒の類、非人乞食などの爲_レ黨、妄に婦女を劫掠し財器を奪候様之儀有_レ之候ては、假令百姓の身にても男子の甲斐無_レ之、及丈防禦之術致候はゞ、上は國家の御爲下は各々安堵に産業を營、勸農理財の基本にも有_レ之義、能々辨別御會得の人に、拙者共一同姓名御しるし、會日無_ニ欠席_ニ稽古_ニ可_レ被_レ致候、尤人數相定候上は、宿内長百姓と稱し、長小の階級を相定、小前の者無禮の義無_レ之様、別紙條々相定差出候間、右承知の人々は姓名御記し印形可_レ被_レ成候、盟會は追て日を定、御案内可_ニ申上_ニ候以上。

慶應四辰年正月

規定

一、三役人の内炮術稽古致さざるものは、畢竟宿内の憂患を深く痛心不_レ致故之義にて、外守衛筋憤發

其宿百姓身助
 近の頼心は
 引渡るも
 其方たる
 事満あり
 可なり
 追ふ

とも也



山莊山印

致候もの、妨げにも相成候儀に付、宿内一統小前同様相心得可申事。但其當人より退役相願候様同勤より可申談事。

一、銃隊に組込候衆人人撰の義違背致候ものは、假令高持身元たりとも、小前へ引下げ、祝儀無祝儀とも上下袴不相成事。

一、高持身元にて後家あるひは極老にて難勤者は、追て相續人出来候まで代人可差出事

但本文の外小前末々銃隊へ不組込ものは、追て竹槍組取立連印可致置候事

一、去る子年御取立相成候農會の内、小前の者も有之候へども、自今相改永々長百姓へ組込可申事

一、小前の者長百姓へ對し無禮有之は役人共より嚴重可申付候事

一、萬一事變發起の節は、役入共より合圖次第速に屯所へ相集可申、且又其時宜により、小前の者へ相當の課役可申付事

但銃隊人数へ不組込ものといへども、銘々宅に居候ては不都合

に付、一所に屯致居、或は手分けに宿口々見廻等可致、其折柄手辨と申すにも成間敷、何れ焚出等も可致、右體の節身元の方より米其外其分限に應じ無違背可差出事

一、銘々炮術稽古の義は、月々二七の日相定、屯所へ出張可致、萬一私用病氣等申偽り不勤之者は、爲過料合藥料の内へ金一分宛急度差出可申事

但役人の内御用他出又は當番の外は本文の通りたるべき事

右者今般宿内一統篤と衆議の上前條取極候上は、長小の百姓急度階級相定、別紙口達書の趣厚辨別致し、眞實の守衛相立候様一同憤發いたし、小銃取扱其外心得方の義は、兼て去る子年被仰渡之通相心得可申候以上。

慶應四辰年正月

* * * * *

宿の本陣樋口傳左衛門世古六之助はじめ約三百人の名前が、それく末尾へ自署捺印してある。

銃隊の人選に違背せる者は、身分高くとも小前に引さけ、祝儀無祝儀共上下はかま相成らざる事な

どは、如何にも面白いが、名前が既に宿内防禦筋議定であり、一寸見るとこの間の大震災火災後の自警團のやうだが、あの前書の四方八方へあたり障りのないやうに氣を配つたいひまはしを見ると、なか

なか近頃の外交文書もそのけである。

多言を要しない、維新大政奉還に際し、全国の代官が京都へ召し集められた時、他の代官はいづれも五日十日とたぬ内かへされたが、葦山の代官だけは、約半歳であつたか一年であつたか、そのまゝ留めおかれたといふ。それは實に箱根の險とこの農兵とのためであつた。

七、砲兵工廠と品川の臺場

九段の靖國神社前の銅像の大村兵部大輔であることは、だれも先刻承知の事である。しかしあの銅像の礎石を圍んでる數門の砲が、伊豆葦山で坦庵江川太郎左衛門英龍の鑄造したる尊い幕末の記念物なりと知る人は多くないと思ふ、勤王は攘夷と手を組み、佐幕は開國と足並をそろへて居たやうなものゝ、三百の大小名その中にそれゝ、勤王と佐幕と互に鎬を削り、京都も江戸も、そこには攘夷に開國に群議鼎を沸かして居た。

先覺の士江川坦庵は高島四郎大夫秋帆を師とし、眼を海外に開きてより、農兵に砲術に築城に製艦に、時局の對策を立て奉公の誠を盡して居たが、常に鎖國攘夷の保守派のため制肘せられ、係累せられ、殊に海防視察のため豆相房總および大島を巡視した時は、監察鳥居耀藏と事々物々衝突し、坦庵

は遂に葦山に籠居して居たこともある。坦庵の

里はまだ夜深し富士の朝日かけ

といふ句は例の裏門から富士を望んだ即興だと傳へられてあるが、これは

里はまだ明けぬに富士の初日の出

といふ句と同じく當時開國進取を唱へた先覺の士坦庵が胸中の鬱懷を漏らしたものであつて、かの井伊大老が

春あさみ野中の清水氷り凍てそこの心のくむ人ぞなき

と慨いた歌とまさに異曲同巧と見るべきである。

黒船が見えだしてたから海防といふ事が八かましくなり天保以來蘭學者は勿論、識者はあげてねらいひ所が大砲にあつまつた。それまでとても大砲らしいものは無いではないが、それは銅や青銅の鑄ものであつて、鋼鐵の鑄ものはまだ手におへなかつた、江川英龍が幕府の力で火砲を鑄造すべく建議したのは嘉永の六年と記されてある、當時英龍は、小反射爐をつくつて見たが、鐵の溶解が思ふやうにいかない、手代を佐賀にやつて鍋島閑叟侯の着手せる反射爐を視察せしめたとある、當時反射爐の試作に手をつけて居たのは、佐賀の外、水戸の徳川齊昭、鹿兒島の島津齊彬兩侯であつた

らしい。

本篇の始に紹介した長州萩の反射爐は、恐らく葦山によりて學びたるものでは無からうか。まだ建碑式は行はれないが、(編者曰く、式は十五年十月十日行はれた。)反射爐碑の原稿を見るに、江川兵式の學につく者幕府列藩數千人を下らすとあり、その門にいりし名士としては、佐久間修理、橋本左内、木戸孝允、井上馨、黒田清隆、大山巖、杉孫七郎、大鳥圭介などの名が見えてる。

幕府の俊豪川路左衛門之尉聖謨は周易の師を佐藤一齋に求めたら、一齋は門人佐久間象山を推薦して彼は自分よりも精通してはすだといふた。象山より周易を學んだ聖謨は、又象山に洋學をすゝめて江川の門に紹介をしたとある、松下村塾の下に記せる如く松陰は又教を象山にうけた、その松陰の門下生木戸孝允が井上、杉など引きつれて、恐らく象山の口入で葦山に學んだのではあるまいか。

葦山在の中村、後に鳴瀧に移されし二基の反射爐は、安政元年起工翌二年に完成したと傳へられてゐる、反射爐の苦心の存するところは、火焰を反射せしむる爐床の構造と、その高度の熱に耐へる煉瓦の製作とである、坦庵はこの煉瓦の原料には長らく苦心して最後に天城山下梨本の粘土を得、よく千七百度の熱に耐へ得たと傳へられてゐる、當初この反射爐を賀茂郡本郷村に設けたのは、交

通の利とこの粘土採取の便を考へたのであらうが、外國使節の屯する下田に近きを懸念して、更にこの葦山に移された。

反射爐は高さ五丈八尺基方一丈八尺、三基互に直角をなしてゐる、當時まだセメントなるものが分らない、粘土と石灰を以てしたがそれだけでは崩壞の憂があるので、全部棕櫚繩を以て巻つけ、これに漆喰を施したため、昔は煉瓦は外から見えなかつたさうである、ところが風雨にさらされて漆喰は段々はける、煉瓦も崩れだす、全部葛蔓に巻きつかれ小松が生えて居たといふ、時の寺内陸相原形の保存を命じ、葛蔓はとり去り鋼鐵の框をはめる、今はところ／＼に漆喰の壁や、棕櫚繩を巻つけたあとの溝が見える、煙筒の方に流用されたる残物の梨本の耐火煉瓦も點々のこつてる。

坦庵は嘉永六年八月品川砲台築造の工事を督し、又小形洋船三隻を造つた、安政元年反射爐の築造にかゝつてる時、砲台竣工の故をもつて賞せられ、次で翌安政二年江戸に召され、寒疾を推して東上し、五十五歳をもつて長逝した。

元治元年幕府葦山の反射爐を廢し、東京小石川關口に設けんとし、後王子瀧野川に移し更に小石川水戸藩邸に再轉し今日の砲兵工廠となつた、その砲兵工廠は日清、日露の戦役を通じて偉大の功績をあげたが、大正十二年の大震災に焼かれ、今や新に中國九州各地に分設せらるゝことゝなつてゐる。

又品川の砲台中第三及び第六は史跡名勝記念物と指定されて、舊陣屋を修理し、火薬庫玉置場等を改築し、市公園課は更に水道電燈等の設備を施して、海上公園とするの議が熟して来た。時は矢の如く流れてゆく、今やフランスのカレイではイギリス海峡を超えてロンドンに打ち込む砲台が築造されつつあるといふ、相模灘から大砲の弾が東京に落ちるには間もあるまい、品川砲台の海上公園も面白い、坦庵も地下で聞いて驚きもしよう、又かの梨本産以上の耐火煉瓦がまだ出来ぬと聞けば、ほくそ笑みもしよう、イヤ歎くかも知れぬ。

江川家は代官である、併し武相駿豆にまたがり管内の祿高は十萬石に上つて居たゞらう、多田満仲の子孫として連綿三十八代におよんで居る。家臣には柏木忠俊望月大象等の名士を出だし、今猶名門として重きをなしてゐる、勤王佐幕の向背を口にすれば、舊大名華族の總てを何んと見る、まして自負心のもつとも強かつた象山にして、我に過ぐるもの佐藤一齋の智、江川坦庵の膽と許したる江川英龍の功績に至りては、遙に時流を抜いて實に維新文化の權輿をなして居る。

世間には華族になつてゐるのが可笑しく見えたり、不思議に見えたりするのが實以て少くはない、今江川家が華族であつたとして別に可笑しくも何んともない、吾華族になつてないのが却て可笑しいやうな氣もする。

此地にいりて始て學友山田三郎博士が江川の女婚である事を知つた、知らぬ事とはいへ二日前、長岡大使頭本元貞君の送別をかねた國際聯盟理事會で、君と卓をへだてて會談をした事であつたが、幕末に開國進取を強調した江川家と、國際法の權威たる山田君との間に縁の結ばれてゐる事も面白い、農兵に鑄砲に又葦山縣知事として盛名ありし三十八代英武翁は、既に七十四歳の高齢となつて居る、今病をもつて籠居し、親しく會談の機を得なかつたのは遺憾な事であつた。

八、反射爐、台場、農兵 (再び)

伊豆の史跡を物知り顔に書き立ててゐるが、もともと、旨の畑違ひの垣のぞきである。山田三良、樋畑雪湖、梅澤梅軒の諸氏を初とし、諸方より手紙に接したが、こゝに紙上で厚く謝意を表する、今一回だけ石黒況齋翁の直話などかきまぜて葦山物語を。

一、反射爐研究のため手代を佐賀鍋島侯の下に遣したといふ記録もあるが、坦庵は長崎の蘭人につきて研究せんとし屢々願へども許されず、安政元年四月手代柏木正俊、家來望月大象、矢田部卿雲を同地に遣し、蘭船スームビンフ艦長スハーヒウスにつき主としてガラナード破裂彈およびボイスを研究せしめたが、どうしても國禁だとして教へてくれぬ、坦庵は復命を聞きて發憤し、日夜研究の結果遂

に破裂弾をつくつたとある、一行佐賀へ序に立よつたか、立ちよらなかつたか分らぬ。

二、品川の台場は近く海上公園として開放されるが、坦庵の建言した富津と品川の砲台築造、その計畫は大分大きなもので、勘定奉行川路聖謨は經費の上より縮小を唱へ、坦庵は小規模のものでは用をなさぬ

「竹に繩をつけて品川沖に立ておくも同様、費用の大小に拘らず國家の冗費なり」と切言したとある、親しく佐久間象山を訪ひ、又江川坦庵には目禮をかはしたといふ況齋翁は、筆者の品川砲台の話聞いて象山の省譽録を示された、

敵笥五章

敵笥在海、魚則唯々、狄人戲謔笑言有、唾、比也笥以竹爲器、以取魚者也、唯々出入不制也、唾笑貌、笥當在河、而今在海、況其敵壤者、安得能取魚哉、宜乎、其魚之唯々然而出入無忌憚一也、以此禦侮失策、而致狄人陵夷一也

つまり魚をとる竹細工の道具は河に使ふのだ、それを海に使ふ、おまけにボロ／＼に壊れてる、宜なり魚は平氣で自由に出入してると冷かしてる、これが品川の砲臺の事だ、象山は坦庵と親しかつたから、坦庵の憤慨に同情して一本冷罵を噛ましたのであらう、いづれにしても新海上公園にはこの因

江川坦庵と高橋謙九郎二人の著書と因

坦庵戯画

江川家秘本



前著は坦庵後著は謙九郎

大正四年三月 雪洲書寫

祭酒安積良齋は

孝弟の道内に修り信義外に著はれて、恩威をもつて都民を撫し忠誠をもつて邦國につくし、邊寇を憂ひ攻苦理趣を究め、もつて砲術の精をつくす、文武兼備雄略超倫と激稱して居る。

縁をしるした碑文がほしい。

三、坦庵病篤しと聞き老中阿部勢州は

空せみはかぎりこそあれ真心に

立てしいさは世々に朽ちせじ

と歌ふてある、水戸烈公は川路聖謨へあ

て

江川大病のよし傳聞當時にありては一

方の長城國家のため全快相祈り候

としるし、猶藤田東湖をして齋藤彌九郎

の許へ見舞をさし立てゝある。

坦庵の門下生には前に記せし外若年寄本多忠徳、勘定奉行川路聖謨大槻盤溪等あり、坦庵逝くや安政三年七月十六日勘定奉行河内守松平近直は自ら大乗經を寫して坦庵を追福せるのみならず、追善のための射的會を催せしに會するもの八千餘人とあり、次で九月二十四日門弟二千餘人追善の銃陣調練を行へりとある、如何に朝野の重寄たりしかどうかゞはれる。

四、坦庵と共に逸すべからざるは柏木忠俊である、忠俊は坦庵を補翼し、次で英敏に仕へ幼主英武を擁して維新の變に京師に入洛し、勤王の大義と徳川幕府に對する舊誼の間に立ち、鏗心彫骨病軀をもつて難關に處し能く情義を全くする事を得た、後足柄縣令となり明治七年廢縣と共に病をもつて致仕し八年長逝し、忠俊の偉勳は彼の農兵の制である、忠俊は坦庵の遺志を嗣ぎ、思を農兵の制に置き、慶應二年、幕府に農兵制を具陳して、全國諸州に實施すべき所以を建議し、一面まづ所管内に之が實施に着手した、即ち管内の老幼婦女の外七萬九千二百人の内より、百人につき一人づゝ七百九十二人を徴し、内六百八人は一小隊卅八人の八小队二大隊として常備兵と名づけ、残り百八十四人は散兵として豫備兵と名づけ、農事の際に訓練せしめ、その經費は所在富豪の負擔とし、五年交代十年にて免役とし、事あれば出征し事なき時は盜禍等に備へしむ。前に記したる農兵の記事は實に病軀三町の徒歩も難かりし柏木忠俊の計畫にかゝりしもので、主肥では當時三人選拔せられ一人は今現存し

でると聞いたが、三島とか下田などでは、いまだに農兵の訓練場がのこされてある。

忠俊は實に國民皆兵の先驅をなせる者として、その名は長へに後昆に傳ふべきである。

挿圖は坦庵の戯畫で、大鹽平八郎甲州にいれりとの風評ありし時、手代齋藤彌五郎を伴ひ、變装して刀鍛冶となり、甲州にゆきし姿をうつせるもので、樋畑雪湖君より模寫して贈られしもの。

九、修禪寺物語

綺堂ものは好きだ、その中にも修禪寺物語が一等よい、綺堂ものとしてもよく。左團次ものとしてもよい、夜叉王の藝術觀、そこに外人にも受けいれ易い氣分があるとはいへ、この戯作がバリーオデオン座に登場せられると聞いた時、これあるかな我意を得たりといふ感じがした。

鳴瀧の反射爐から下田街道に引きかへし、大仁から狩野川の支流に沿ふてさかのぼれば、そこに桂川をさしはさみて修善寺の温泉場がある。温泉場としての修善寺はあまりに世間に知れ渡りすぎて、同じく知れ渡りすぎてゐるが、範頼と頼家の墓にお詣りする

親を手にかけた信玄はその子勝頼に至りて一族天目山に亡んだ、その勝頼の首を蹴飛ばしたり、岳父淺井淺倉の首を肴に杯を擧げたり、弟信行をだまし討したと傳へらるゝ信長は本能寺に殺された。

その又あとを次いだ秀吉は秀頼を眼にいれても痛くないだけに、とうとう秀次に詰腹を切りさせる、畜生塚を築きあげる、しかも肝心の秀頼は大坂城に亡んだのであつた。

豹のやうな義経を、奥州に雪隠詰にしたのはまだ忍ぶべしとして、牛のやうな範頼、幾たびとなく頼朝に誓文ばかり出して恐縮してゐる範頼、それでも恐縮さが足りないといふので修善寺の片隅に小さくなつて居る範頼の息の根までとめる、故あるかな源家の嫡統頼家はその子一幡を比企の亂に憤死せしめ、己も叔父範頼のあとを逐つて、同じ修善寺の露と消える、弟實朝が又兄の二子公曉と血で血を洗ふ、源家三代は誠や骨肉相食の歴史である。

佛説に過去現在未來三世の因果律を説いてゐるが、今世に業を作りて今世に果を得る順現業もあれば、次の世に果を得る順次業もあり、數世の後に果を得る順後業もある。

信長は順現業で、頼朝、信玄、秀吉は順次業ともいへる、世界大戰に千古希なる大悲劇を生んだ、露國ロマノフ王宮の没落は歴代の積悪の報と見て順後業とも見られるのであらう。

こんな事を考へながら湯の街を通りぬけると、すぐ右に折れて山の傾斜の夏草しげる小道を右に左にのぼること二町足らず、さうやかな森があつて、範頼の小さい石のほこらが小さい石燈籠を前に、チヨコナンと祀られてゐる。

引きかへして名利修禪寺門前の虎溪橋を向側に渡ると、山の中腹に道はゞの廣い石段がつゞいて、登りつめると、二位の尼が長子頼家の冥福をいのるため建てた一切經藏指月殿があり、それにとなりて又石階の上に頼家の塚がある、廣場にはヤレ築山、ヤレ石階、ヤレ祭具とか、いろいろの名目で寄進の札がズラリとならんでゐる。

かうなると範頼の方は大分貧弱すぎる、其祠が湯の街の目貫の場所から遠いだけに、地の利を得ないといへばそれまでだが、それにしても大分に開きがある。明治十三年に小山清三といふ人の寄進で、墓畔に建てられた蒲侯の碑といふものによつて、僅に佛を偲ぶよすがとする、その墓前の石燈籠が思ひだされる、甲府市の志村甚兵衛といふ名前が刻まれてあるが、その上に新井浴客とある、新井とは菊屋、淺羽とならんだ一流の旅館である。おれは範頼の子孫でも何でもない、縁もゆかりもない、といふてこの土地の者でもない、しかし範頼その人が氣の毒だ、ことに頼家の墓と比べていかにも見劣りする、おれは通り一べんの旅の者だが、おまゐりして見るとアンマリ淋しすぎる、たゞ石の祠だけだ、だからこの燈籠を寄進したのだと、新井浴客なる四字が雄辯に語つてゐるやうに感じられる。

地の利を得ぬといへばそれまでだが、それにしても頼家に比して詩的氣分が薄い、どうも範頼の柄がバツトせぬ、もつとも梶原平三景時に圍まれた時、信功院に火をつけて死んだといふから、最後だ

けはバットしたらしいが、どうも何となく爺むさいじみである、同じ兄弟でも義経は大分人氣がちがふ、それだけに一層氣の毒千萬である。

今夜は三津どまりだが、道すがら長岡の温泉組合からは是非立ちよつてくれといふ、時刻が大分のびて来たが、少憩することにした。

十、長岡、三津、土肥

(編者曰、本章及次章は石井先生の筆)

【長岡】

滑らかな長岡の湯で一風呂あびて上つてくると、待合せた温泉旅館組合の諸君から型の如く長岡發展策について聞かされる、夕なぎで熱い日だ。

大和館主人大和宇平君二十餘年前五十圓づゝの金を借りては掘り、借りては掘り、その十二回目にとうとう温泉を掘り當てたといふことから、今では隣りの古奈と合せて温泉宿の數四十幾つ、やがては沼津から江ノ浦、三津濱を経て長岡驛に連絡する環狀電車を完成したいといふことだ、抜いてくれたいのあわと共に勢よくふつかける。丹那がぬけ更に箱根越の遊覽電車でも出来る事になれば、口伊豆の發達は素晴らしいものであらうと海南博士も受答へにたちくた。



町のはづれに板倉勝憲子等の經營する華族村がある。研究會の鹿ヶ谷谷として時折りは新聞を賑はすところだ。山をむやみに切り開いてをる。大學を出て大量生産の豆腐屋を企て、自動車で配達せんとして、舊臣達から『御祖先に對しましても』を食つたが受け容れず、勇敢に開業してことごとく失敗したといふ、殿様には出來過ぎた歴史付の御人の目論見だ。今度は豆腐のやうにこはれぬやうにと祈りながら、一行又汗ばんだ洋服をきて、自動車道の二十分、トンネルを抜け、山を下つて三津濱、安田屋旅館にいる。

【三津から土肥まで】

七月二十四日、晴。

淡島がぼつかりと紺碧の上に浮いてをる。この島と陸との狭間にニユツと富士山が見えるのが三津の自慢だといふが、生憎の雲でナンにも見えない。

宿の前で東京から来た女學生達かのびくと發達した四肢や、眞黒になつた顔をさらして賑やかに泳いでをる。背に置き忘れたたかむしろに朝露がつめた。島山の岩かけ、松のこすえに魚見のやぐらが見える、蒲原や田子の濱に打よせた黒潮のあほりがぐつと東にそれて、流れ込むのでこの港は漁撈の地として名高いのださうな、朝の膳からすゞきの洗ひが出ていくらでもおよろしければお代り

を」といふ。

自動車飛ばして江ノ浦静浦の濱邊に涼風をいれつゝ沼津に出で、正午下田通ひの芙蓉丸に客となつた。芙蓉丸と名こそ匂はめ、百トンのボロ船だ、支店長や、船長、事務長の好意で甲板にイスを並べてもらつたり、むしろを敷いてもらつたりして僅に凌ぐ。

日本人は船をいやがる、航海を恐れる、海國に生れて怪しからぬと人もいひ、自分でも時々おしやべりするが、さて考へて見ると日本人の———少くも東京人の海國思想に甚だしく障害を與へたものは、この汽船の類ぢやないか、とフトあられもない考が一過する。荷物や乗客の現状ではこれで澤山だ、といふ説明も出るであらうが、きつと氣持のいゝ、少くも夏の房州、伊豆の旅などには是非船に乗つて家族づれでと勇み立つ位の船が出来てもよいはずだ。外國の例など一々引きだすまでもあるまい、これが何より手つ取り早い海國思想鼓吹の道ではあるまいか。それやこれやの話の間に船は牛臥御用邸の沖から、淡島を左に、大瀬岬をまはつて戸田の港へと進んでゆく。

沼津から戸田まで一時間、戸田から土肥まで一時間。

土肥で下船る。はしけで村の有志が出迎ひに来て自動車が待てるますといふ。山と海とに圍まれてどこへも動く餘地のない村にも一台の自動車があつて、海岸から温泉宿への客を運んでをる。海南博

士の説に従へばこれも「明治大正に生をうけし人々」の喜であるといふ。ガタ／＼と走つて街に入ると、この名譽ある文明の先驅者はドンと電柱に體當りをくれた、オヤといふ間に車も人もよろ／＼として横へせると、その支柱へしたゝかぶつゝけて自動車は泥よけをこはし、ハンドルを曲げてベ

チャンコになつてしまつた。人命 幸に異常なく、明治館別館にいる。

前の田圃を隔てゝ大きな煙突から煙をだしてをるのが見える、土肥金山會社の採鑛地である。一風呂あびてブラ／＼浴衣がけで見物にゆく、資本金二百五十萬圓の全額拂込、鑛夫數二百人、鑛石は全部住友がもつ四國四阪島の精煉所へ賣り込むのだといふ。「まうかるかい」と聞くと所長の浦六左衛門氏、敵打で切られさうな名前の持主が、若はけの頭に汗をにぢませながら「四萬圓位まう

かるだけだが、これからウントやるんだい」と力味んでをる。聞いて見るとおれの同窓だ。夜は清雲寺、それは、あまり強くなかつたらしい頼朝の家來富永某といふ土肥の城主を祀つた日蓮宗の寺で一行講演をする。門前には二三の屋台店が出て氷や、ひやしラムネを賣つてをる。いよくもつてお祭りさわぎだ。

十一、堂ヶ島と石廊岬

おのしが一しよでないので朝酒は飲まず、ボーカールはやらす、到るところで海南博士と飢饉年の口シヤ農民みたいに水瓜ばかり食つて、聖地巡禮のやうな旅をつゞけてをる。

沼津からだんく奥へすゝむにつれてお主の『放任の禮』が戀しくなつて來だした。ほしくもないものを食はされたり、飲まされたり、接待に念がいりすぎて温泉をくみかへ、眼の飛び出るやうな熱いやつにいれさせられたり、前途がだんだん恐ろしくなつて來だした。

七時の一番で土肥を立つ、今日は相摸丸、二百トンの船である。

天城から分れて西へ走つた山々が海にぶつかつて、あわてゝウンと踏みこたへたやうに、水のほとりて切岸になつた海岸線を見てをると、人の住めるところもなささうだが、入江ごとに猫の額ほどの平地があつて、人家がチラリホラリ、漁村、農村を丹念に一つく尋ねて、南へ南へとゆく。

仁科の港から松崎町長依田氏が出迎へに乗り込む、やがて松崎についた、土地の人々に迎へられて上陸、中食後發動機船を仕立てて石廊岬見物に出かける。薄ぐもりの静な日である。飛魚がスツツと飛ぶ、波は僅にうねりを見せるばかり。

波の穂を眞一文字に飛魚のすれすれにとびてまだ落ちずけり

海 南

發動機船の音遠ざりて七月のまひるの海のしづかなるかも

海 南

雲見浅間、波勝岬と船はすゝんでゆく、東道の前田福太郎君は竹柏會の同人、歌あり

漂渺たる海をはるかににはか雨ふりすぎゆきてこゝにとどかず。

きる波の岬の岩にをどりあがりしろくだけてたぎつを見たり。

箕掛島、大根島、ぐつと左にまがると早や石廊岬の燈台が見える、今は昔一全くさういひたくなるとその昔の話、秋から冬にかけて太平洋の浪はきまつて荒れ狂ふた、相模灘から遠州灘へ、あるひは西から東への往來の船が暴風に追はれて救ひをもとめつゝこの岸邊に近づく事が多かつた。その時あたりの里人はわざと暗礁に近く目印の火をたいて船を迎へた、難破！惨死！略奪！さうして里人達はうるぼふた。福が來た、福が來た、福岩だ、福岩だと死の暗礁は讚美の的になつてゐたといふ。

難破のことから話は安政地震の當時、下田で破船した露國軍艦にとんでゆく。露國使節ブーチャチン、安政元年軍艦デアナ號に乗じ下田に入港、通商問題を議してをる最中に安政の大地震、下田港の大津浪となつてデアナ號は底に穴をあけてしまつた。さてその修覆をせねばならぬが、あの港はいかぬ、この港はまかりならぬと、すつたもんだの揚句、時はクリミア戦争で英佛との關係もあつて戸田がよからうと、こはれたまゝで進行中駿河灣でぶつこはしてしまつた。一行は戸田に腰をすゑてスタ

トナ型帆船一隻を造り、翌年になつて引あけて行つたが、その打つぐく遭難の中にも、ブーチヤチン
 は下田に行つて通商條約を結ぶやら、佛國軍艦の下田入港を知つてこれを襲つて難破船の代船にしよ
 うと企てたり、少からず活躍の跡を残してをる、その多くの話の中でも大津浪の翌日、自分の船が破
 損して死者をだしたにも拘らず、二軍醫と看護卒とを下田番所に遣はし、町民救護の援助をなさしめた
 といふのは面白い、殊に歸國の翌年スクーナ型船一隻に砲五十二門を乗せ、戸田滞在中のお禮だと幕
 府へ献上したなども、ズバリと切れ味がよいではないか、日本はおかけで戸田造船から西洋型の船を
 造り得るやうになつた。

いつの間にか船は燈臺に沿つて長津呂の入江にはいる。鍋底を逆にして、錆びくちるにまかせたや
 うな奇妙な色と形の岩が、ムザと兩岸より相迫つてをる。その間をおあつらへ向に松の木が點綴して
 眞青の水に影を落してゐる。船を止めて幾百尺の崖の上、石廊燈臺へと上つて行つた。うす霞して七
 島も、八丈も、大島も見えない、遠く神子元、近く簀掛の島々だけが雲煙の彼方に漂渺としてをる。
 大景だ、あいにくと今日の波静にして波濤洶湧の偉觀だけは見られない。「石廊権現」そのとつばなに
 『縁むすびの神』。荒海の神様もやさしいではないか、野百合の花がかけの下に赤くさいてをる。

* * * * *

松崎に歸つたのは暮に近かつた、春城院といふ寺に長八鍔細工の辨天様を見る。明治初年の名左
 官長八は鍔一本でどんな細工でもしたといふ、明治十年内國勸業博覽會の褒状がある、いはく

「……、鍔ヲ用ヒテ各種ノ泥灰ヲ塗抹シ、水彩ノ設色ヲ描寫ス、衣紋骨格毛筆ヲ用フルニ勝レリ……」
 松崎の名物は風景と「長八もの」の外、毎年廟相場が日本で最初に立つといふことである、そのほ
 かにも何か話されたやうであつた。

隣村仁科の堂ヶ島洞窟は石廊岬と共に南伊豆で見落し難い壯觀である。洞門の幅十餘間、高さ數間、
 長さ百餘間、舟行自在、大きさだけから見ればカブリ島の瑯玕洞もくそ食らへである、奥に底知らず
 の洞穴がある、その昔頼朝、密書をこれに投じたら鎌倉にちやんと現れたといふ素晴らしい傳説が残
 つてゐる。こんなニューマチツクチューブは、ニューヨークだつてロンドンだつて、どこにだつても
 あるまい。

S 兄

お主も一つ見に来ちやどうだ。

十二、下田條約

七十五里の遠州灘と四十里の相模灘を左右にたち切つた伊豆の半島、その突角にある下田の港、上り下りの唯一の船がかりとして、慶長年間伊豆金山奉行大久保長安は、下田代官をかねて下田に水關を建てた。

下田の海の關所、こゝには元和の二年秀忠の時から奉行所が置かれる、船の改番所が出来る。大小の船荷は皆點檢して江戸行には下り切手、かへりには上り切手と稱せられたる通船證を付與する。寛永年間からは貨物出入の請次取扱をなすべく、かの大阪方面の菱垣回船、灘伊丹方面の樽回船、赤穂才田方面の鹽回船、その他各津浦々よりの株回船の四組よりなる回船問屋が出来る、一年の出船入船三千艘を下らず、それが又長々と風待をする、そこで

伊豆の下田に長居はおよし、しまの財布が空になる

(囃) ヤアレ下田の沖に瀬が四つ、思ひ切る瀬に切らぬ瀬に、取る瀬に遣る瀬がないわいなアエといふ下田ぶしも出来る、どうして丹後の宮津どころではなかつたらしい。

さうしたところだから、黒船も折々下田に顔を出したに不思議はない、併し出された方は少なからず驚く、毛髪を束にして頭上に直角に横たへ、殺人刀を二本までたばさみ、木片の上に兩脚をのせて、反り身になつた連中は、ヤレ開國、ヤレ攘夷と一と皮眼をつるし上げて激昂しはじめた。

この間開港條約締結の衝に當つた連中は、國粹團や攘夷黨を背後にして、いはゆる異人さん相手の談判をはじめ、實全くやり切れたものではなかつた。

嘉永七年の林大學頭、井戸對馬守對ペルリの間の、謂ゆる第二下田條約、安政元年の筒井肥後守、川路左衛門尉對プーチヤチンの間の日露和親條約、安政四年の井上信濃守、中村出羽守對ハルリスの間のいはゆる第二下田條約

と前後三つの條約が結ばれたが、筒井肥後守であつたか

イギリスもフランスもみな里言葉、たびくあふはいやでありんす

と歌つてあるが、實際一々通譯いりではイヤでありんしたであらう、その又筒井と兎角意見に扞格のあつた川路聖謨は

まがれるもなをきも同じ弓と矢の巖をうがつ心づくしは

と歌つてゐる、國歩内外兩難の渦中に起ちし當面の人々の苦衷また諒とすべきである。

黒船の來泊から下田にはいろいろの副産物もちあがつてゐる、中にも有名なのは吉田松陰の渡米事件である。この事件は松陰の日記、スパーリング及びペルリーの日本遠征記などにより、委曲は盡されてるが、何分にも唯漢文字だけによる日本人松陰と、怪しげな日本語の米人ウキリヤムスと、不十

分なる米蔵の廣東人羅森等の間に交されたる、片言の日本語や支那文字や、手眞似身振りの交渉だから、名々の思ひちがひも少くはないらしい、そこへ當時の奉行所なり、町の人、牢獄のかゝりの人達の文書や口傳へに、又それの相違がある。下田の村松春水君……一寸見は三十そこ、よく見て四十からせいぐ五十位に見えてその實當年とつて六十九歳といふ……は過日東京放送局で吉田松陰と題し、その乗船に次で傳馬船漂流の次第、さてはパツテラで上陸するに至りし経緯、番所における取調べから平滑に入獄の模様、獄卒の心づかひなど、松陰の日記とその間多くの隔たりがあるといふので、逐一その真相なるものを放送したといふ、その同君からも親しくいろいろときかされもし、又石井信一君の下田開港史を見るとくさぐさの事情が説明されてるが、結局今まで至極簡單に片づけてゐた松陰の下田事件も、讀めば讀むほど、聞けば聞く程だんぐ分らなくなつて來た、素人はあまりコナナ事に深いりはせぬことだ。

十三、吉田松陰疥癬物語

唯松陰が無事に乗船出來て渡米したとすれば、定めし維新の元勳として偉功を奏したらう、その中に征韓論の騒ぎが起る、海外視察に眼ざめて岩倉、大久保と説を同じくしたか、それとも舊によりて

廿一回猛士であり、西郷、江藤の轍を踏んだらうか、いづれにしてもこの米艦に乗るかそるか、日本の歴史に大した影響を來たしたわけである。

一説にはベルリもその熱誠に動かされて搭乗を許さうとしたが、軍醫は松陰の双手ひぜんの爲に汚れたるを見、艦内の衛生上峻拒して遂に逐ひ返さるゝに至つたとも傳へられてる、疥癬の有無が乗船の許否を決する唯一の原因でも無かつたらうが、兎に角疥癬で汚なくなつてた事は、逐ひ返さるゝに與りて力ありしことかと、うなづかれる。

下田の港は犬走島を中央に、西の方城山公園は古松老杉鬱蒼として懸崖千仞紺碧の海に臨んで居る、天正小田原の役清水上野守正令が、秀吉の水軍志州鳥羽の九鬼嘉隆、土州岡豊の長曾我部元親、淡路洲本の脇坂安治、同じ志知の加藤嘉明、家康の水軍向井兵庫頭正綱、本多重次等の軍勢を迎へて奮戦した鶴島の城跡である、之と反對に東に當りて柿崎の一角、彼のハルリスの領事館を開きたる玉泉寺の濱邊に辨天島がある、松陰金子重輔と安政元年三月二十七日傳馬船を米艦に向けて漕ぎ出したところに、松陰遺墨七生説の碑が建つてある、辨天島に往事を追懐し、更にオウトを驅つて蓮臺寺の温泉石橋旅館に居る。松陰日記の三月二十日の條に

余疥癬稍發す因て間を偷み蓮臺寺村に往て温湯に浴す

とある。旅館の西方一町餘の地には松陰一時假居の茅屋が見える、傳ふる所では松陰の獄に下るや、下田の市中では由井正雪以來の大事件と許りに騒ぎ立てる、假居したるこの茅屋の爺さんはピツクリ仰天して、松陰の残せし文書類手回り一切を纏め、引つかついで鞆を手にして飛出した、どこへどう埋めたのかそのまゝ分らず仕舞に爺さんは亡くなつたが、あとになるとアノ松陰はエライ人だつたといふ評判が立つ、サアあの爺さんが埋めたといふ松陰の遺物を掘りだせとばかりに、有象無象があとに残つた婆さんに心當りを尋ねるが分らない、何んでもアノ方角へむけて出かけたやうだと聞いて、矢タラにその邊をアチコチ掘りさがしたがつひに見當らないといふ。

松陰の渡米出来なかつたのは、かへすぐも心残りの事である、併しあれから江戸の傳馬町、次で萩の野山の獄、次で杉家の幽囚となり、それからが例の松下村塾となる、僅に二年半とはいへ、あの時に生みだした村塾々生の維新の活躍を見れば、國の上から見て松陰の米艦搭乗の不成功は弔すべきか祝すべきか、神ならぬ身の知るよしもなしである。

蓮臺寺の温泉も共同湯は少々濁つてるさうだが、この旅館のは無色透明きれいすぎる位だ、これが疥癬によく利くのかどうか分らないが、同じ疥癬でも罹かつた人と場合によりては、大きな運命を左右するともいへる、疥癬だからとて馬鹿にはできぬ。(廿七日湯ヶ島温泉に清流の音を聞きつゝ)

十四、唐人お吉と下岡蓮杖

下田黒船來泊の副産物には、彼の我國西洋形船舶建造の範を残したる露艦デアナ號の大破事件もある、さうかと思へば戀のハルリス唐人お吉物語もあれば、下岡蓮杖寫真物語もある。

下田の教坊に艶名を歌はれた明鳥のお吉、新内お吉の稱ありし十七歳の嬌妓は、安政の四年であつた、幕吏の強壓と支配組頭の勧誘により、情人鶴松との愛を割きて、當時五十四歳のハリスの侍妾となつたのが序幕となる。

それから三年目にわけありてハリスを辭し再び教坊に現れる、のち放浪の旅に上り情人と再會する、いくばくもなく別れて三たび左袂をとる、ハリスの死を聞きて神奈川に墓を建て故人を弔ふ、とる年波に痼疾に悩みながら、ハリス遺愛のコップに冷酒を盛り、新内を歌ふてたお吉は、とうとう半身不随となる、揚句のはてが明治二十三年五十歳にして、下田郊外河内門栗の淵に身を投じる、大正の十年、薄命なるお吉のために一基の塔が建つ、米國大使バンクロフト氏下田來遊の時、使をその墓前におくり、拈香といふところで大團圓となる。

このローマンスは、どうかといへば小説か脚本むきであるが、茲には唯荒筋だけ拾つておく、詳し

くは村松春水君が近く世に公にするとエラク力んでゐるから。

唐人お吉は日米親善通商條約に功ありしといふ、それは間接に功があつたには相違ない、筆者が臺灣在職中、南洋の或地方と交渉事件のあつた時、干與した吏僚から親しく報告さるるには、今の方の理事官は我天草女を側に置いてゐるので、諸事交渉にも便宜多く好意を持つてくれるが、そのうち賜暇歸國する、さうなるとかれの留守中にこの事件は逆轉するから、是非その前に解決するやうにしたいと、事や細かに天草女禮讚の長講一席を聞かされた事がある。

お吉擁護論者たる村松君の話は半分に、三分の一に、十分の一に、聞く人によりて勝手に割引をしてよろしいが、お吉によりて萬里異郷の客の旅情が慰められ、自から日米親交に資するものありしといふくらゐは舉手賛成してやらうぢやないか。

下岡蓮杖は江川英龍と相並んで伊豆が生んだ人材だとおもふ。

どうせ寫眞はいつかたれかど、眞似をして覺えるであらうと、一口にいつて仕舞へばそれまでだが、下岡蓮杖は實にその寫眞術を學ぶため、先覺の士として異常の苦心を重ねたのであつた、彼は天保六年十三歳にして畫家たらんとし、下田より江戸に出たといふ。漸くにして狩野董川の門にいらり董古と號した、一日知人の家で銀版寫眞を見てその技を學ばんとし、ハリス玉泉寺にありと聞くや下田にか

へり、外使給仕役となりてこれに接近をはかり、ハリスの祕書兼通譯官ヒュースケンにつき、はじめて寫眞術を學んだが、當時寫眞は切支丹伴天運の魔法と稱し、寫眞をうつすと三年の内に命が無くなると傳唱された時分である、蓮杖は武山中無人の地にいらりて撮影の法を研究せるも、もと／＼ヒュースケンも専門家でない、蓮杖には藥液の名さへ分らない、この間の苦心は一方でなかつたらしい。その後横濱が開港となるすぐ出かけて、寫眞師ウンシンにつき教を請ふたが、ウンシンは惜んで教へない、漸くにして寫眞機と彼れの畫と交換する、蓮杖はこの寫眞機と使ひ残しの少量の藥液により、苦辛慘愴遂にその技に達したといふ、江崎禮二、鈴木一眞等皆彼の徒弟である。

油繪に、パノラマに、石版印刷法に、牛乳の搾取に、蓮杖は我國文化の先驅者であつた、現に京濱間を汽車の通ぜざる前に、蓮杖は馬車でこの間を往復したといふ、面白いぢやないか。今下田で寫眞界の一部の人達の間に翁の建碑の企てがあるといふ、筆者は下田町講演の壇上でも、翁のために一言し、同時にこれが建碑は必ずや翁の心血を注いだ記念の地たる玉泉寺たるべしと加へておいた、今日は、新聞に雜誌に日々寫眞の恩澤に浴せざるものはない、あらゆる科學界はもとより、藝術品としても寫眞の効果は普及向上しつゝある、寫眞で迷惑を感じるの是指紋をとられる前科者位であらう。

松陰が傳馬船を仕立てた柿崎の辨天島を右に見、左折して少しく上れば我國最初の領事館たりし玉泉寺がある。ハリスの室にあたる天井には寒さしのぎに貼り付られし紙が赤黒くくすぶつたまゝ、ところ／＼剥ぎのこされてあり、煙突のチューブを通した穴も欄間の上に昔のまゝ残つてる、本堂正面を隔て、向ふ側には例のヒューステンの部屋がある、こゝへ寫眞の研究に浮身をやつした蓮杖が毎日通ひつめたのだ、その同じ本堂の建物から毎朝外に出て毎夕内にいりし鋳打ちの乗り物籠、いかめしく警固の者に護られて、籠の中には當年十七の明鳥のお吉が運ばれたのだ。

下田の町には奉行所、番所、台場の遺跡もあり、外船に薪水食料を供給した欠乏所のある、將軍家茂の越年した海善寺、武ヶ濱の農兵訓練處、さては松陰の假の宿、拘留されし長命寺、平滑の獄など名所舊跡が多い、自動車の便も、夏の海路のありがた味も分らずに、下田知らずの多いのは惜しい、今ぢや財布が空になる心配はない。

下田から下賀茂にゆく途上、例の慶長の宮女遠流の遺跡がある、下賀茂の温泉は豊富で多量に噴出してゐる、そこから南方一里の海濱には海軍の湊病院がある。

十五、白濱から天城越

(編者曰、本章また石井先生の筆)

二十六日の夜、下田の講演を終へて、蓮台寺温泉に泊る、そこより北上すれば天城越えの本街道であるが、一行は他に目的を有し、今朝宿を出で、再び下田を過ぎ、東に迂回し、海南博士が「地方財政」起稿のため書きいれにしてるといふ模範村白濱村に到る。心天草の採取権を村が持つて、その収益で村費を拂ひ、いろんな基本財産に多少づつの繰入をなし、尚かつ毎年各戸に若干の配當をなしてゐる。飯田村長豫算表をだし、村治一班をくり廣げて詳細に説明してくれる。

村有基本財産が卅余萬圓、學校基本財産が三萬圓、罹災救助資金九千圓、育英資金二萬三千圓とあけてくると成る程とうなづかれる。昨年は心天草採取の總利益から村費くりいれ、育英資金くりいれ等を差引いた残り十三萬二千圓を三百六十余戸の村人に平分したといふ。一戸にすれば約三百六十圓に當つてゐる、即ち村費全部を支拂つて尚三百六十圓の収益配當を受け、これに自分達の勞役収入なり、その他の収入と併せて、平和にその日を送つてゐるといふことである。

白濱一帯の地先水面には二百にあまる心天草取りの船が浮んでゐる、毎年五月から十月までが採取期だといふ、夫は船をこぎ、妻はもぐつて、夫婦共かせぎが多い、引かきといふ漁具をもつて海底を引ずりながら採取してゐる船もある、

「うらやましい状態ですな」

といふと村長の飯田さんは微笑しながら

「こゝまでくるにはいろいろ苦しい事もありました」

と話をすゝめる。慶長の昔かち村の心天草採取権は認められ、田地肥料としてこれを用ひて来たが、文政に至つて水野出羽守の手許に取あけられ、始めて寒天材料として大阪等の市場へ送りだされた、その後幾多の變遷があつて明治五年再び採取権は村に戻つて来たが、その利益配分は旦那衆に厚すぎ、小前に薄すぎた、明治二十年頃自由平等の叫びはこゝにもおよんで以來、収益はすべて各戸均分といふことにきまつた。

村のいらかも美しい、どこやらに豊かな風が吹いてをる。かうなると他村からの移住者が殖えて来る、むやみに移入しては村が立たなくなる。白濱村漁業資金配當に關する規程」を設けて他町村からの轉籍者は二十年経つて十分の五、三十年を経て始めて一人前の配當を受けることとし、その轉籍にもいろいろの制限を加へて来た、一寸アメリカの眞似ですといふ。全村の戸數四二五、そのうち配當を受くる家三六〇戸余といふのが現状である。

「配當を受けてやうやく暮して行くだけです」

と村長さんは満足なやうな、物足らぬやうな表情をした。

辭して又自動車に乗る、雨がばらばら来たがすぐ晴れる。谷津温泉で晝飯をし、偶然にも徳富蘇峰翁の一行と出あふ。

こゝより河津川を廻り湯ヶ野で本街道に合し、いよく天城越えにかゝる、名にし負ふ天城越えも道坦々として何等の危険はない、御料林の針葉樹相は濃き緑をこめて、涼風水の如く流れて来る。山に甘茶の木多く、これを帝に獻じた由緒から甘木山と呼び、いつの間にかそれが天城山となつたと物の本には書かれてある、明治の初年日本で造つた軍艦天城の艦材は全部この山から切りだしたものだといふ。海拔二千八百尺のトンネルをぬけると、やがて湯ヶ島に著く。

このあたり清流を引いて段々畑にそゞぎ、山葵の栽培をしてをる、出迎への上狩野村長大川氏の話にその産額年六七萬圓に上るといふことだ。

今宵は水の音をきゝつゝ湯ヶ島落合樓泊り、やまめの煮べ、鮎の鹽焼に杯をあげようと存じまする。

十六、頼朝と八重姫

世の中はかごに乗る人乗せる人腰の痛さよ肩の痛さよ

時は眞夏七月の末である、送迎案内宴會講演、お客になつてゐるわれ々も、これを迎へる土地の人

々も何れも樂ではない、たゞ當方には毎日耳新しい眼新しい、しかし相手かはれど主かはらずである、それでも去年の北海道の事を思へば大分荷が軽い、しかし今度は伊豆の旅日記に筆を執らねばならぬ、樂ではない。

石井睡蓮、台灣總督府參事官のみぎり、故北白川宮殿下妃殿下御同列にて御渡台となり、島内をお伴してゐるが、睡眠術の奥儀に達せりとありて、親しく殿下から睡蓮の名を賜つた、天下御免の居眠りの名人も、自分の受持ちの日となると得意の居眠りを封じて折々手帳になにがしか書きとめてるところなど、近頃もつて殊勝の至りでいゝ氣味である。

湯ケ島の一日に兩人共原稿の整理が追ひつく、明くれば二十八日、太田縣議に迎へられて、伊東祐親親子、源頼朝、工藤祐經、曾我十郎、五郎と、すこぶるやゝこしい六角關係發生の地たる伊東に向ふ。

人間は色を好む、英雄は人間なり、故に英雄は色を好む。頼朝は英雄なり故に色を好む、英雄でなくとも人間である以上色を好むに不思議はない。

頼朝は十三歳にして平治の亂に戦ひ、幼名通り鬼武者として武名を擧げてゐる位だから早熟の方である、だんくゝ年を重ねる、ニキビもで来てきただらう、聲變りもして来ただらう、どうしてモウ三十

に手が届いて来た、ニキビが下火になつてしまつてゐる頃だ。身分職業はといへば無職の浪人であり、流人である、いはゆる當節の失業者であつて、さて食つてゆくには不足がない、腹のへらない發情期の失業者である以上、至るところ發展したのに不思議はない。

頼朝は手始めに伊東祐親の息女八重姫と情意投合する、投合の結果千鶴丸が生れたが、大番頭として京に詰めてゐた祐親は、伊東にかへつて、娘が人もあらうに流人の頼朝と通じ、子まで出来たと聞いて眼をまはした——おのれにつくき八重姫とムカ腹を立てたところへ、生さぬ仲の後妻がそばから大分たきつけたらしい、六波羅への聞こえもはゞかりありといふので、千鶴丸を松川上流の淵に沈める、血を分けた孫を手にかける位だから、頼朝を殺さなければ腹の虫も納まらねば、平家にお覚えもいかゞである、ところが二子祐清はそれはおよしなさいと止めたが聞きいれがないから、頼朝に内情を通じる、かうなると色男も七里ケツパイで、宇佐美網代の險を越えはうぐのていで逃げだす。

話かはつて安元二年十月の十日、赤澤山の狩倉に河津祐泰は所領の争から、一族工藤祐經の家臣、大見小藤太、八幡三郎の遠矢にかゝり敢ない最期を遂げた、それから十八年の天津風、遺子曾我十郎、五郎の兄弟が富士の巻狩に工藤祐經を討とり父の仇を報いた事は、あまりに世間様で知られすぎてるが、なぜに河津祐泰が遠矢にかゝつたのかは、世間から知られてゐない、それでは祐經が少々可

哀想であります。

十七、新編曾我物語

起りが所領の争とあるが、元來河津伊東宇佐美の三ヶ庄は工藤家繼の所領であつたところ、家繼病篤く死に臨みせがれ祐経幼少なるにより弟伊東祐親に後見を頼んだ。ヨクあるやつだがこの後見人慾の皮がつつばつてる、あはよくばねこばいをきめこみたい、世間のおもわくがある、祐経十四歳の時にこれに長女をめあはした、その中次第に自分の勢力の根が張られてくると、祐経が成人してもこれに土地を還さうとはしない、かへすべき所領をかへさずに一旦嫁にやつた以上、かへすべからざる娘を引き戻して土肥次郎實平へ再嫁せしめた、祐経憤慨するやら、いとしい戀しいで、手勢を引き具し、女房取戻しのため土肥を攻めたが撃退される。戀女房はとられる、所領を酔のこんにやくのといつて返してくれぬ、祐経をはじめ家の子郎黨の口惜しがつたのに不思議はない、たゞ話を聞いただけでも腹が立つだらうぢやないか。

工藤は源氏方、伊東は平家方となつて居る、六波羅へも訴ふるに途なく、さて正面から手向ふだけの實力もない、そこで八幡と大見の兩人は赤澤山の狩倉のかへり途を椎の木三本で待ち伏せした、伊

東祐親の長子河津三郎祐泰が一の峽に見えた時は、兩人いまだ矢にかけやうとは考へつかなんだが、二の峽に見えた時敵の片割れだ平家方だやつつけやろうと遠矢にかけた。あとからついでに祐親が一の峽に見えた時、へうと放つた矢は爺さんの鼻先三寸を流れていつた、更に二の峽に見えた時又第二の遠矢をかけたら、かぶら矢は祐親の左指二本をそぎ落した、祐親指を落されて驚いたが、そこに長子祐泰の死骸を見るや、怒心頭に發し、あとよりついでに二子祐清に曲者打ちとれとばかり、鎧をたいた、祐清は家子郎黨を引きつれて押しよせる、八幡は腹をかき切る大見は逃げ損じてからめられたとある、考へて見ると大見八幡も割の悪い可哀想な男たちである。

曾我兄弟を引き立てるためには、祐経は芝居では赤づらになつてるが、叔父祐親が非道な事さへしなければコンナ羽目にはならなかつたのだ、しかしこれも成りゆきだ、祐経が富士の狩屋で暗討にあつて見ると、今度はその一子犬房丸が五郎の首をはねて仇討の仇討をしたいと願ひでる、流石の頼朝もこれには小首をかしげた、十郎は死んでしまつてる、それへ追つかけて五郎を首にする、又仇討の仇討の仇討と際限なく、お次は蝶六その次は大磯と、順々に首にしては曾我の家一座が全滅となるから、この邊で打止めしよう、伊東工藤兩家に手打さして仲直りをさせたといふ、その祐清のあとが、中國筋の大名伊東家であり、祐経のあとが日向飯肥の大名伊東家であるといふ。

話は大分枝から枝へと花がさいた、この邊で頼朝に戻る。

十八、尻 摘 祭

伊東から北條へ逃げのびた頼朝はすぐ時政の娘に着眼した、退屈しのぎとか性慾の衝動とかいふ外に、當時の頼朝としてはその土地の有力者と親しい関係を結びつける、つまり政略結婚が必要であった、甘い戀をさゝやきつゝ、かたはら相手の娘を人質にとるのである、それも流人であり孤兒である頼朝としては、勢ひ直接行動に出る外はない、時政には娘が二人ある、政子は美人だが繼子であり、妹浦代は二の町だが後妻の出とある、伊東の八重姫で手を焼いた頼朝はモウ繼子にはコリ／＼した、二の町でも三の町でもよろしい、浦代と手を握らうと安達盛長にラブレターを託した、ところが盛長は政子の方が別嬪でありしつかり者である、浦代では結局あとが納まらなくなると思ふたか、それともはし豆な頼朝だ、三角關係にでもなると面倒とでも思ふたか、浦代あての手紙を政子へ手渡し、たといふ、随分思ひ切つた事務管理で、法律上この意思表示は戀愛の當事者の重大なる錯誤として、當然無効たるべきであるが、この戀は事實成立してしまつた。

この時丁度政子が妹の吉夢を凶夢と偽り、賣る者は禍を免れ買ふ者に咎なし、これ移轉の法なりと、恩にきせて唐鏡一枚衣一襲で夢を買ふた時だといふ。どうも女の不見轉はあるが男の方から不見轉の附文は振つてる、又女の方としても相手は評判の源家の御曹子である、垣間見位はしてゐたらうと思ふが、マアそれはどうでもよい、困つたのはこれが又時政留守中の出来事であつた。

時政京よりの歸り路に、目代平兼隆と行を共にしたが、その旅路に兼隆から娘政子を嫁にくれといふ話を持ち上つて、よろしい差あけませうと約束した。ところが還つてみると留守中に頼朝はチャンと政子を手にいれてる、今時の若い者は馬鹿に敏捷だ、どうも油斷がならぬナアと感心はしたものの、目代兼隆への約束にはハタと當惑した、しかし時政は祐親とゆき方がちがつて、マアなるやうにしかならないと、知らぬ顔の半兵衛で目をつぶつたまゝ政子を山木の館におくる、ところが八重姫の如く從順ならざる政子は、尻に帆かけて山木の館を飛びだした、面目をふみつぶされた兼隆は血眼になり八方に手を分けて政子の行方をさがす、かうなると時政も乗るか反るかといひたいが、實はモウそりの一手より外はなくなつた。

そこで歴史では治承四年以仁王の令旨をうけ頼朝兵をあげ、まづ時政をして山木に平兼隆を襲ふて首をはねしめたとある。

伊東では歓迎の宴から講演、翌朝は太田、古見、坂田の諸君はじめ町の有志の案内を受けて、北里

博士の萬人風呂をはじめ、日蓮上人や伊東祐親の遺跡など見物に回る、面白いのは唐人川に熱帯地でなければ見られぬ、湯こひ、毒魚、じんなら、蛇うなぎなど棲息し、それが淨の池といふ古池に收容されて、今や名勝記念物に指定されてる。この唐人川の川尻で慶長十年より十一年にかけて、例の英人ウイリアム・アダムスこと三浦安針が、浦賀に漂着したるマニラ提督ロドリコを乗せて、メキシコに航した百トンのサンタ・ブエナ・ベンツィラ號を造られたといふ。彼の家康の時の安宅丸といひ、戸田の幕末の造船といひ、伊豆は日本の造船史には因縁の馬鹿に深いところである。千鶴丸を柴づけにしたといふ松川の下流に日暮の森と音無の森がある、頼朝は八重姫と密會すべく日暮しの森で日の暮れるのを待ちわび、暮ると川を渡つて音無の森でおとなしくランデ・ブーをしたといふ。こゝには音無神社といふお宮がある、毎年十一月十日に祭典があり、その時は點燈は禁じられ、暗やみの中で無言のまま式を行ふ、神前で神酒を飲むときは口は利けない真くらだ、尻を摘んで合圖をして土器をまはす、いはゆる尻摘祭といふ儀式で、頼朝八重姫密會の故事にもとづいたものだといふ。

筆者が宗旨ちがひの史跡調査？伊豆めぐりといふので、至るところ故實家が、色々議論をたたかはず、この音無の森についても密會とは嘘だ、祐親は不在、二子祐清は源氏方、なにを苦んで森の中まで密會の要あらんやといへば、他方では後妻豊田の方もあれば長子祐泰もあるからは大びらにも参るまい、ソウ頭ごなしに抹殺されてはたまらぬといふ。

案ずるに密會の内容にも色々と解釋があらうが、假りに館でいはゆる密會をして居ても、たまには手を引いて郊外の空氣も吸ひたからうぢやないか、今ならば自動車で一寸熱海までドライブとシヤレたいのだがさうもいかぬ、せめてこの森あたりで手をとりあふて散歩もしたらうぢやないか。傳説は傳説たらしめよ、頼朝とても木や竹でない、天下をとつてからの頼朝には理智が勝ち過ぎて、尻まで摘まんだかどうか知らないが、マアかうしたところに頼朝の人間味もあるといふものだ。

十九、初島のパツカリ

大島の高ねのけむり雲のうちに凝りてうごかず片くもりせり
月今し雲間にいりていさり火は初島あたりまたける見ゆ

伊東熱海の間には宇佐美網代の險がある、三十年前のわらじの旅では随分汗をかゝされた、然し熱海まで延びて来た鐵道は痛切に土地の有識者を刺戟したらしく、海に沿ふて斷崖絶壁を切り開き、立派な道路を完成した、今日は熱海町長石渡氏等の一行に迎へられ、自動車で涼風をきりながら海岸を

縫ふてゆく、山水の風光得もいはれず誠によいドライブである。

熱海伊豆山と来ては今更紹介するがものはない、富士屋で晝餐をすませ、一行丹那トンネルの入口を下に見て、どなたも先刻御承知の梅園にゆく、梅園といふても松あり杉あり、春は櫻、夏は青葉、秋は紅葉と四時の眺めがある、梅園と名づけられると、日本人のことだ、たゞ春先ばかり出かけて、手當り次第梅花を手折ることに決てるやうだが、名は實の賓なり、宜しく熱海公園と稱すべきである。熱海と伊豆山の中間、絶壁を脊に海洋に面して熱海ホテルの歓迎會に臨んで居ると、温泉寺の講演場から矢の催促がくる、いよいよ打止めの壇上でオシヤベリをする、汗は伊豆山相模屋の千人風呂で流す。

今日は初島行とある、海上約三里、そこに三百五十人近くの浦人が住んで居て、戸数は昔から四十三戸と相場が決つてる初島、病人が出来ると南の濱で火をあけて、網代の醫師に駆けつけるのではない、こぎつけてもらふ初島、警官は熱海から戸口調査や衛生視察などに年三回くる外に、とんと用がないといふ初島、石井睡蓮からは與謝野夫婦と曾遊の地として、かねぐウント聞かされてる椿と水仙の初島にでかける。

一行は石渡町長と富士屋と相模屋の主人、それに警察の署長さんに地元の中田君である、ところ

がイザ出掛けるとなつてから、同行のはずの睡蓮は急に還るといふ、逗子の子供達が懐かしく里心がついたのだらうが、署長さんの、波が立つて来たモウ少し様子を見よう、といった一言を小耳にしたに相違ない、そのいひ草がよい、どうも同行に和尚さんが見えた、波の上が恐ろしいといふ、成程温泉寺の住職鷲嶺師の顔が見える。學生角力の大關、柔道三段、體重二十一貫の睡蓮も、船となると謙讓の美德を發揮する、惡留めせずにかへす。

發動機船は宿の前から初島さして、ゴト／＼音を立てて駛り出した、靜なるべき海上は島近くの瀬にかゝつて、大にゆれはじめ、ハ、ア矢張り和尚さんが一枚入つてからだナと觀念すると、すぐ靜かになる、よく／＼見ると、和尚さんの隣には伊豆山の神主北山の大人が控へてる。

初島では區長さんアチコチと案内してくれる、この島は矢張り四十三戸ですかといふと、區長さんいはく、

別に規則といふ譯もありませぬが、この上住む場所もなし、それ以上の人が殖えると、自分から奮發して海外に参ります。

區長さんの海外とは伊豆の國だからおもしろい、浦人は俗にはつかりといふ追込網を見せてくれる、十年程前琉球人が来て教へたものだといふ、

貫五百のオモリのついた長い紐、それにシヨウギの木片をとろくりに結びつけたものを二三十ヒロの海底までぶら下り、三間おき二間おき一間おきに漁師の人垣が、次第に網へむけて追ひ込んでゆく、兩船相迫りて網を引き上げると、たひやさばは潑刺として我等の船にはね飛んでくる。

初木神社の松の木かけてテーブルやイスをかりだして、ビール、サイダー、西瓜の宴を張る、かねておみやげにと持ちこしたお菓子を振舞ふといふので、河童のやうな子供達眞つ黒になつてたかつてくる、娘の子や中年増や大年増は、後方約五メートルの間隔を保ち、喜びの色に満てる我子達のむら立てる姿に見いりながら、傍の野天に置酒高會せるわれら一行を流し目で見てる。

伊豆山の神主さんは、東鏡かなに鏡かに初島の婦人は容色絶倫とほめちぎつてあると、大分前觸れは大きかつたが、それほどのことはゴザンせん。

浦人に別をつけ、初島を一周して魚見崎錦ヶ浦の鼻にむけてかへる、熱海の街を左舷に見つゝ、はや伊豆山に近き頃、水上二丈足らずのところに、松林の中に圍まれた小さな家が一軒ボツンと立つてる、この家は五丈ほど上の断崖に沿へる熱海街道の茶店であつたさうだが、大正十二年あの大地震に茶店の夫婦はとり膳でお晝のおまんまを食べて居ると、急に前のがけがすんぐと上つてゆく、アレ前のがけが上つてゆく、どうした事だらうといふてる中に、いつか止まつて動かなくなつた。おかしな事が

だと外へ出て振り返つた拍子に、今まで懸崖の下に見下してゐた海面がスグ眞近に迫つてるのを見た時は、イヤ驚くまい事か、びつくりせまいことか。

樓門五三桐では石川五右衛門君は煙管を手にしながら、南禪寺の樓門ごともろに舞臺へセリ上つて来て、絶景がなくと反身になつて見得を切る、がアノ大地震にチャブ臺を前にお箸と茶碗を手にしながら、茶店ごともろにセリ下つてゆくなどは、けだし珍なるものであつたに相違ない。

二十、伊豆はどうなる

湯の村ゆ湯の村にくれて走湯の湯の國伊豆にいく口へにけむ。

今日はたれも知るなる走湯の伊豆山権現にお参りする、人皇五代孝昭天皇の時の御造營、仁徳天皇の勅願所、役小角の終身奉仕せるところ、嵯峨天皇の勅使として弘法大師の参向など、恐ろしく由緒が古く長々しいものある上に、頼朝は流人のときも天下をとつてからも、關東の總鎮守として尊崇あり、實朝に至りては二所権現の参拜が前後たしか七八回におよんでる、かの箱根路を山傳ひに、十國峠の手前からおりてくる、伊豆の海の沖の小島に浪のよる見ゆ、とある小島は例の初島である。

神佛混合で寺領二萬石を超え九十坊を算したといふ、今は僅に神殿と拜殿をのこすに止まる、その

建物は足利尊氏の建立と傳へられてる、曆應二年參河守高師冬が御造營の立願文に幕府の雄兵安全にして常州の兇徒敗亡するときはとある、常州の兇徒とは多分關城に立こもつた北畠親房などと南朝の面々を指してゐるのだらうが、常州の兇徒は振つてる。

その師冬の寄進になつた大伽藍も今はあとかたもなくなくなつてる、五重の塔は維新の際賣り食ひの代に持ち出したらしいが、積み込んだ船は川奈の沖で難波したといふ。

今日は大島は見えず初島が半霞んでる、伊豆山の左近といふ男と初島の右近といふ女が、火をあけ合圖をしては三里の海をのり切つて相びきをしたといふ、その左近はこの伊豆山神社の神さん、右近は初島の初木神社の神さんだといふ神話のやうな傳説が残つてる、昔は高石君やカナハモク見たやうな水泳の達人が澤山あつたと見える。

今日はゴルフリング候補地選定と號し、口先許り玄人さうな態度をとつてる筆者は三島岬に案内される。伊豆の海を見下してゆくながめも絶景だが、岬の切通しを抜けて富士の神山を前に、江ノ浦靜浦一帯の山河を見はるかす風光は得もいはれぬ、いつ見ても富士は好い、ことに伊豆路からのながめがよい。

こゝでいよいよ伊豆の旅を終る。もしこれが歐米の天地であつたなら、富士の山麓を一週し、少くとも一線は分れて長尾岬より箱根に通じ、更に三島に下り、沼津、三津、長岡、修善寺、韭山の環狀線から、天城越の下田線、そして熱海より三島、伊東への二線の外、箱根、十國峠間の尾根傳ひの線などは、自動車を驅り電車を走らしむべき眼貫の線として出来上つて居るであらう。沼津から戸田、土肥、仁科、松崎を経て石室崎を中心に下田まで、更に白濱、河津、伊東、熱海まで、觀光専門の船は横付になつた棧橋から奏樂のうちに動きだす、甲板の上に食堂もありバーもある、樂の音を耳にして逐ひくる鷗の群に餌を投やりながら、船は長汀、曲浦をぬふてゆく、陸上のトンネルで煙にむれるよりも、海上のデッキの上の方がどんなに氣が利いてるか分らない、さぞや伊豆海岸めぐりの船はお客様の目白押で賑はふ事であらう。

恐らくこの海岸めぐりや初島見物ぐらゐるでは満足出来ぬ、役小角や八郎爲朝で知られた大島、英一蝶、竹内式部の流された三宅島、浮田秀家の流された八丈島など、伊豆の島々が南にはしつてる、七島めぐり八丈行、更に小笠原島行の觀光船も出来て居るだらう。

マア船が嫌ひの海國男兒、海を恐るゝ大和民族に、コンな事いふのは今更野暮かも知れぬが、しかし存外夢のやうな事も實現されぬとは限らない、徳川鎖國前の日本人は、八幡船で海上を家として南洋三

界まで、発展したのだから。

終りに沿道の有志各位にかさねて一行に代り厚く感謝の意を表しまする。(終)

追録

編者いふ。本文挿入の外、海南先生旅中の吟咏次の如し

土肥

湯の街ゆ松原見れば金山のけむりうごかず海はなぎてあり

漁笛鳴れば湯の宿いでし旅人ら畑みちづたひ濱に行く見ゆ

松崎より石室崎

伊豆の海あしたの海の沖邊なぎて天草とる船のちらばれる見ゆ

石室崎そぎ立てる岩のとつはなの岩のはさまの山百合の花

七月の空どんよりと曇りたり七島は見えず海のしづけさ

* * * * *

○

私はまた、修善寺から伊東に越える峠から、風に吹かるゝ初島の風景に歡喜して、山の上から村落へ馳せおりた心持を忘れることが出来ぬ。

山上からみた初島の美しくしさは處女のやうであつた。新鮮で閃いてゐた。

私は一思ひに空に高く手をあげてとびたいとさへ思つた。

いまだかつて私はこれほどの歡喜を感じたことはなかつた。

箱根と、妙高山麓と、伊豆山上の展覧とから受けた自然の印象は、私にとつて意味深い記憶である。

前田夕暮氏「雜草園隨筆」より

2-3890

か

昭和二年二月二十五日發行
昭和二年二月二十五日印

(非賣品)

編纂者

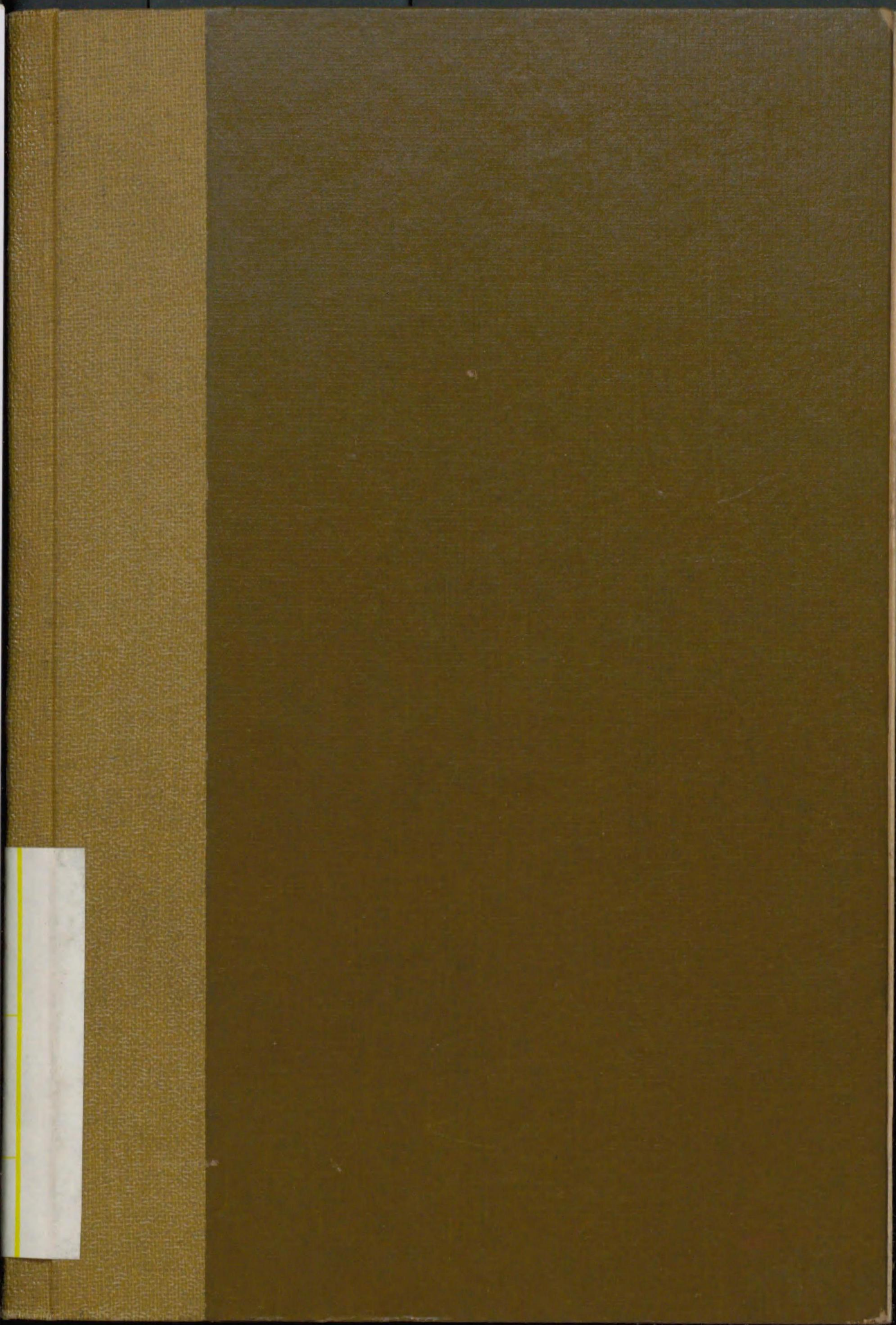
伊豆循環鐵道期成同盟會

東京市京橋區弓町二五番地

印刷所 三協印刷株式會社

549

208

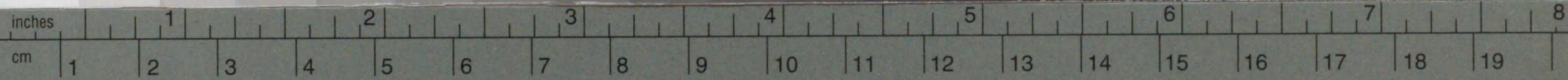


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

